



敵討野路乃玉川  
後篇  
貳

遠  
975  
7





遠門  
號 975  
卷 7

本清

復讐言野路の玉川後篇卷之二

滄海堂主人編述

世宗  
滄海堂  
主人

樓上の空蟬

諸も西川屋禮三郎の邊物首尾よく果ゆきべ是より直

旅宿の之に翌日いかろし京師に歸る用意とあさ  
んと力藏と随へ立出るふ茶車仲居ホのおしとめ未だ  
ゆるい更なぐり席と何しとめ今一應の直させし  
くしと只管すしむきども今夜とやく歸るしとめ翌日

野路の玉川



の積つみりの何なにしとよとて。とりぐひ相あひ袂たもととくしひ旅宿りゆうしゆくとよとて  
 帰かへる哥妓かゝ舞妓まゝ仲居ちゆうゐのとりぐら出口でぐちまで送おくらんと。小  
 鈴すずかつとりし随したがひゆくは八重やま茶ちやの折をり阿あしく杖つゑ頃ころの時とき気きは  
 てれ昼ひるの程ほどより心地こころち阿あしくと外あららざる客きやくめへおしく  
 来きままくく勤つとめめが今いま諸しよももは礼れい三さん郎らうと見み送おくらんとあれ折をり  
 ぐく志しさりと腹はら中ちゆうのこここ出いしまをく苦くくりられば杖つゑす  
 と朋友ともぢゆう又またつづきき宜よろしき又また佗言たごんと傳つたへまじれと頼たのみおとき壹ひと個こ杖  
 家やよとどまりて楚そくく痛いたみおこらりまが家やへ帰かへりて杖つゑ程

ぢぢりり医い師し又またのひひひ茶ちやとも服ふくし且かつの先さきとくらく得え  
 る手てぐらの一通つうも首くび尾びあくしてのままま力ちから藏くらは渡わたされ  
 ば杖つゑ事ことと告つぐらんとまづく臺たい所じよの端はたらく痛いたみまのび  
 く打うち臥ふしが主しゆ人にんのひとす心こころと用もちひことありく風かぜ氣きと  
 うけるば又また煩わづひと益えきのけるり一い時じ間かんまも浦うら團だんを敷しせ  
 艱か生せいとくふよとおもえ聞きゆら九く段だんの前の支のまぶんと  
 八や重ちゆう茶ちやの美引ひしゆへ今かく病やまひとのりらるる客きやくと送おくばとぐ  
 まりの我の會と手段だんあらんと大おほい悦び眠り居る婢







女等と呼おこし。楼上は程よく八重をぬいの森間とこころ  
 進ませよとまうり廻しつ言つくるは婢女ホの目とすりおがら。  
 楼上よりつらつら蒲團とのべに。稍て下来たつて八重をが手と  
 とり彼所へ行せよと臥室よともるひ白湯おどつて  
 辺りにおさめつと退出ぬ八重をい志どく有て痛も漸く  
 薄やどしどし急な浮びをさすひるれべ心せりく楼上を  
 下りて。廁よこといとし行ぬ然もども家内の者ども何れも  
 今宵の草臥まじ。此所彼所はい秘あり居る。此事と知者

更よありり。九助いいとて眠も中。八重をが廁へ行  
 と彼所より伺ひえ。是幸ひの上首尾よりとさう足ぬを  
 足忍びく。梯子を登りて楼上より行燈の火とつと  
 つひつ。燈心と減ど火くげと暗く。臙よか。八重をかくま  
 来てるが鬼やせん角やえり。んと此所は来るを待倦ぬ。  
 仲居お熊の大勢つと立西川屋の主従と出口まで見送  
 りつ道。許多の唱婦より仲居四五人つと立て帰  
 る。下女も婢も草臥まじ。つと端近く打倒を前



後もあつて打ふらり。寂早夜明は遠くぬべ臥室に入  
 んも甲斐あつて連の仲居のゆるとも枕もおさで轉  
 び寐の前後もあつて臥けるが。お熊の心は一物ゆれば眠る  
 婢女と謙し起つ八重をが事と尋ねる。八重をぬくの  
 悩と絶つ先より樓上よりあつてひぬと語るをきとお熊  
 ほうあつて料理場の傍辺より出る出又庖丁とひそりよ  
 めさのりら忍びく登る段むと格気の角の生立し心の  
 鬼こそ怖しと行燈のともし火暗して治定と安六分とぬと。

かしこよ壹個臥るの紛ふらあつて八重をりりと心しつら  
 伺ひするよ丸助は是と先のほどより。八重をの飯しと心得  
 られば物ともいては寐入る形勢よりてるせしうらうひ  
 寄り寄るお熊とが詞もくけ尻裾引とく抱さつくと手と  
 うらるお熊のひとへは八重をと思ひつめらるまられば不審  
 むる心もろく是幸ひと及とより上よりそふ拍子よ九分ら  
 咽ぶ骨もくけと突くんとあつて一声さけひつて些し  
 悪書ととづれとくが苦しとるが身とくへ起上るをるぬ



ところと起しおこも中ちゆうに又また一突終ひとつしゆうは止めをさしさりりりり。かくハ  
 さにさよりより気きも高たかぶりぶり九助くすけがささけけぶぶ声こゑも覚おぼへへ凡おとこ男女にんねうのたたが  
 へへも更さら又また心こゝろ乃のつつららざざりりしがが乗のりううつつもも其その面おもてととよよしくしく足あしをを  
 八重やえををささるるでで夫ととの九助くすけるるりりららばばささもも悪わる気こゝろのおおくくままるるれ  
 ども是こゝははつついいりりややとと打うおおどどろろととああままれてて詞ことばももるるりりーーががあ  
 さまさま又また為な方かたるるくく且かつ跌お所とはは長居ながいせばせば夫ととと殺ころしし科しなああままに  
 刀やいばとと立たつつてて罪つみせせららるる人ひと帰かへぬぬ操まは言ことはは時ときととううののままありあり一先  
 こことと立たつつののままでで大津おほつのの兄あにはは秋あきよよとと談うたひひ鬼おにもも角かくももるるべべとと

直ただよよこことと立たんとんとすするるはは憊うるる物ものの拍子たぶままやや九く々くがが着きるる  
 浴衣ゆいの袖そでととああううとと握にぎりりつつめめららりりがが故ゆゑ人ひとととるるせせどもども拳こぶしひひ  
 ぐぐ又また右みぎの手てはは携たづへへ。出で又また庖丁あぶらもも握にぎりりすす甚い堅かたくく  
 放はなままざざればれば是こゝははつつらら強つよくくもも握にぎりりつつめめららるるやや我われららがが浅あままししとと  
 数かず心こゝろととああせせももどどもも更さらはは拳こぶしののゆるゆるままざざればれば斯かくてて漸しだはは夜よもも明あけ  
 たるたる人ひと来きるる腕うでももぐぐとと浴衣ゆいの袖そでとと其そのすすりり引ひききりり右みぎ  
 みのみの又また左ひだりのの九助くすけがが浴衣ゆいのの斤袖うでとと握にぎりり持もつつとと幸さいひひはは又またをを  
 是こゝはは巻まつつとと両手りやうてとと一ひと所ところははよよせせららるる暗くらままとと忍しのびびひひでで明あ







ぬらちやと足むや又北と望みて走行ぬ

○櫻宮の朝露

斯くおくまの辛ふとて櫻の宮の辺まぐ足はまうせく走  
りしが夏の夜乃短くして早くも東の山の端あらし  
と出る諸鳥の声もあやふ聞ゆるふ斯く次女まで道を行る  
忽ち人れとぐむべし且の道と只管も走らるれば咽喉渴  
息も絶べく覚へしる濱辺は下立水も飲み身ごしらへ  
とも直さばやと汀よりて包むる又とひくまで左右に拳も

みさうりしを放さんと種も心とこそせど憊るれば握つら  
雨の拳木とれと作りしごとくそ指も更又動ざればお熊  
の幾どゆえれとて只は拳と打まりの嘆息つとて立ちま  
るる然るにまん咽喉渴しとあづくも絶がたなキよ  
とく人も握つらる雨の拳の開ざれば其やうは四をひと  
るりく岸よのぞきて流す口よせ水を飲んと這よりくる時  
は今年弥生の頃より雨ふるごとく数回うせ既は水無月  
の中旬といへども兩日つとて晴天るると灘后るゆへ洪



水のつらと度々なりしが此日も尚出水しく淀川の水りさ  
 壹丈の余るより其水勢つひに倍せしほどよおくまら  
 叶りぬ奉つとさそ四遠とるりて流よのぞも咽喉の渴と  
 潤さんとぬは忽ら拳とて渦巻流きの水中に真  
 逆よそ落入り強氣の女頭をあげ岸よあつんとあせま  
 ども左右の拳自由るぬ岸の柳よ取つとも得ば水勢  
 つよと淀川で浮ぬ沈ぬ流を行ぬ突やおくら悪報  
 速よさうり夫が他心と憤りて嫉妬よ其身と苦しむるい

是則修羅道なり左右に拳うかりびし四遠よ歩むこと  
 畜生道のあつあり咽喉渴しと流よのぞもかつて水よ  
 溺るは是餓鬼道水中よ入て其身と苦しめ終よ命と亡は  
 地獄の責れいよ何きも天のゆりゆるべし  
 世の人朝夕は慎しむべきの邪なりなと悪事の小事をり  
 とも必ばしもさぶる善事の何やどせりとも勤行行ふ  
 べきは是の諸おき八重花の其夜をさるる肢分海を  
 再び楼上するもより得ば下座敷の採側よ夜とあせし



夜あけて後主人出来り八重冬う腹痛のよしとてさうい尚  
 態は介抱しやうと駕籠よのしりめく家を送り其後下女  
 は命とて楼上おどと掃しひるま下女の九助が死骸は驚き  
 としどの半あり轉び落て志むし心もつりざりしが水よ  
 茶とひりめとて漸くよころつと九助がことと語るおど主人の  
 又も驚きし直は楼上よりけ上り朱は染る死骸とて色い  
 紛らるる九助よりて出刃庖丁の類もく咽喉と突し風色  
 ろり然るふ浴衣の行袖は引ちざりて行方志まれば是又は

この一箇より斯く済むと変わるねば公は訴へ檢校とねが  
 らし程もゆせぬ官人来ましとこの為躰とくとかんぐく  
 家内の上下出入の男女のこゝに召を吟味する更はそれ趣  
 意こくりぐく稍久しく時と移しあま同司の官人淀川は  
 り女の溺死はうととて訴へおより是を見とけ茲は来合せ  
 互は変死の風色を物語るふ今川すもて見とけ女は  
 左の手は浴衣の袖と握り右の手は出刃庖丁と携へれば正々  
 彼女の為業とて坊男の害せしきと直は女の死骸と







取らせ坂松やれ主人に見せしめよ。則ち男は女房するは言  
 上る。猶て女は握り持する。浴衣の斤袖と何れもむへ。こも  
 則ち九助が斤袖とて。あらも突る出ぬ。推へれば。こも  
 せし者外。又のる。あは。尚其殺せし趣意と吟味し。あふ。  
 女が懐は一通の友ありて。九助より八重を。送し艶書あり。こも。  
 恪気の憤心より。くる大事と。誤せし。あんと病氣られ。こも。八  
 重を。召ま右の始末と。尋ひ。あふ。妙程九助八重を。意慕  
 し。あふ。口説て止ざり。まども詳く。分り。こも。九助と害せし

おくまが冤恨の事。此れも速く分り。双方とも相果れば。外  
 吟味の子細も。まゆ。あふ。済し。坂松屋の主は。妙人の  
 死骸と。つげ。大津へ。あふ。せの使の男と。よび。あふ。上を  
 下へ。とり。あふ。ぬ。突や。兩人とも。不義。あふ。夫の妻への節義  
 と。失ひ。妻の夫への貞操と。捨る。あふ。か。横事と。醸せし。あり。  
 只と男女貞節の道。堅くも守る。あふ。あふ。あふ。

復雙言野路の玉川後篇卷の二終



